



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	豚コレラを防ぐ方法
Author(s)	宮城, 正夫
Citation	琉大農家便り(6): 4-5
Issue Date	1956-05
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19571
Rights	

刈取時期によつて草の品質に大きな差異があるが、石塚氏によればスキ生草は五月刈は粗蛋白質三%で六月は二・四%七月が一・六%になり八月には一・三%に減少している。一般に若刈するほど蛋白質の含有量は高い。

又施肥すると蛋白質の含有量は著しく増加するのである。又草の部分は莖に比べて蛋白質やカルシウムに富んでいる。

草は蛋白質の含有量は少ないが、その蛋白質は一般に栄養上優

良な性質を有するものである。又一方、前に述べた様に穀類等に少いカルシウムやビタミンを多く含み、その飼給の上からも特に認識せらるべきで、欧米に於ては豚、鶏まで放牧して青草を充分に与えて家畜を健全に育成すると共に、飼料量を安くしているのである。

豚、鶏にもなるべく柔い青草や青菜を充分に与える様に注意しなければならない。(宮城常夫)

豚コレラを防ぐ方法

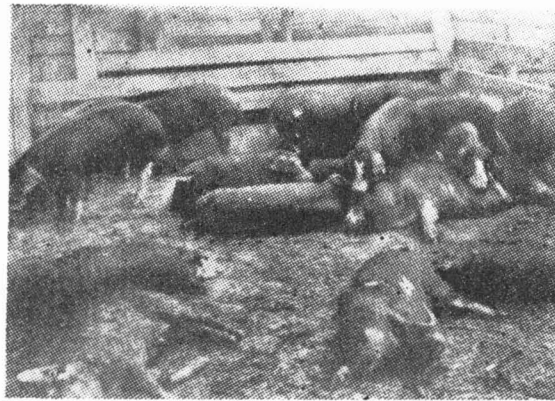
或る本の書き出しに「油細は実に豚コレラの本場にして」という一節があり吾々には誠に迷惑な文句であるが申に説明して「吾邦に於ては明治四一年油細に勃発したのを初めとし爾來しばしば大流行があり、或地論の如きは殆んど全滅の惨害を蒙つた事は流行史の語る所である」とある。油細に於ける大流行は大正九年十年で其の当時約二万頭の発生と云われて居るが此等の事実から「豚コレラの本場云々」と云われるようになってしまつたと推察される。

戦前油細が獣疫の巢窟と云われ家畜の伝染病は傳んでもあるという誠に家畜伝染病研究者には都合の良い国とされたが伝染病の危険にいつも曝されている家畜は正に風前の灯のたとえの通り危険であり一度其等の獣疫が流行した場合等は死体の山を築く惨状を呈し後には其の伝染病に耐え得た家畜だけが弱蒼わづかに子孫を殖やし得るに過ぎないと云われた。勢い其等の病気を耐え得た家畜は多少の免疫性を獲得し得る事になりかゝる事を繰り返す内其地の風土に適した家畜所謂土産畜が造られて来るわけである。然し乍ら其処に優良種畜を導入し改良しようという場合は此等の家畜は直に其等獣疫に直面して犠牲となり改良の実績を擧げ得ない事になる。つまり土産畜が強い家畜

で改良種は弱くて駄目だという事にしてしまふ。此が農民の牢固として抜く事の出来ない信念になつてしまつて農業の發展を阻止してしまう結果となる。実に家畜の改良増殖には先づ防疫が先決問題とされる所以である。そこで今から約二〇年前此等の獣疫を根絶するため日本政府が滿州国と協力して積極的に行出した結果其の業績は終戦直前頃には顕著なものがあつた。特に屠疽(全家畜及び人類を犯す)牛疫(牛を犯す)に対しては其等の予防注射により其の絶滅は時間の問題とされた。此は全く固の政策と科學陣の勝利であり、やればやれるものだという自信を得たが其の点に立脚して油細の豚コレラを根絶する方法無きやと焦慮するが不幸此は前述の屠疽や牛疫の様なわけにはゆかない複雑な疾病の様である。

凡そ獣疫の発生は後進国に限定されるものと考えて大体間違はないが豚コレラに付いては先進国の合衆国も其の被害は決して少くはないようである。即ち一八三三年オハイオ州で発見されて以来百余年すつと本病の発生があり年間六百万頭といわれるが殊に其の最盛頂は一八八七年一八九七年及び一九一三年一九一四年であり一九二六年には再度大発生を見ている。其の経済的打撃はたつた一力年で六五〇〇万弗に昇り過去一〇方

年の平均は年々二〇〇万弗(二四億円)を下らぬと云われる(米農務省発表)此等は勿論直接の損害であつて間接的なものを計算すると更に莫大な額に増加する。尚、米國に於ては一九一〇年コレラの血清製造が完成し此の三十力年にはコレラ血清及びワクチンの製造は次第に改善され効力は顕著になつて来ているが其の根絶は未だ其の見透しを得ていないようであり、如何にしたら其の発生を最小限度に喰止めるかに腐心している。



豚コレラに罹り次々倒れて行く
豚の悲惨な光景 (米國にて)

又最近の日本食肉加工情報によると日本に於ても昭和三十一年は昨年比し豚コレラが各地に発生し相当蔓延の徴候があると即ち大阪、兵庫、福岡、大分、佐賀に相当数がり思し殊に大分では七十頭位の病豚が肉屋に出されているとの疑いで二斉検査を始めた由である。さて本場の現状はというと四七年二七頭、四八年一八頭、四九年二七三頭、五〇年一四〇頭、五一年八八頭、五年二〇八四頭、五三年四六五頭、五四年二〇六二頭、五五年二六六九頭となつて年々増加の傾向にあるように見受けられる。此は報告されたもののみであらうから實際的

な故 害は更に大きくなる事は想像に難しくない。

何故に本病は各国研究所の弛まない研究と政府の東京的予算運用にもかかわらず其の根絶は困難だろうか以下其の原因体と感染する経路について調べて見ますと、

本伝染病の病原体は一九〇三年の過性病毒(トールス)である事が発見されたが此の病毒というのは細菌と異り如何なる光学顕微鏡でも発見されなかつたもので極微細なる過性の孔も通過して捕捉されないものでたゞ其の病毒の端のみ出す結果によつて認められるものである。此の病毒は病豚のあらゆる臓器分泌物、排泄物中に含まれる。即ちり病豚の尿、鼻汁、唾液、眼液より排泄され此が経口的に再取される場合自然感染が成立つわけである。其の感染経路としては人が手足、履物、衣服等に病毒を附着し或は牛、馬、犬、猪、鶏、鼠、雀、鷹其他野鳥昆虫等より病毒が運搬され、又肥料により或は舎具、藁、野干草、飼料等により運ばれ本病發生の因となる。河川に豚屍体或は其の残物をすてたため下流域に多数の発生を見た事例がある又本病の發生に重大な関係を持つものに牛肉及び肉製品(ラードも此に含まれる)がある。此等は前述せる大分県の例にも示す通りで、り病豚及び潜伏期中の豚肉を利用する事に基くもので一九一五年―一九三二年の五カ年間北米ヌーランド州で二六七七件の豚コレラ發生中二四五件(八四%)は実に病豚肉に起因したが此は農民の自家屠殺と自由販売によるものと考へられている。肉製品に就いては冷凍された病豚肉で九五日後病毒を証明し二五%の食塩液に漬けたもの(油漚の塩豚は乾塩法による場合が多いが其際大体重量の五%位の塩をこすり込んである)は三週間伝染性を持ち又塩漬(水一〇〇に塩二〇の割合)したハム(臘肉)が八〇日後、尚病毒が生存していた事が証明され結局塩漬しても病毒は滅殺されないという事が云われる。其他潜伏期中の牡豚との交配或は潜伏期中の豚の購入移動により発生する場合も多い。これによつて油漚にあつた終戦後の事例を想い出して見ますと次の様な事件がある。(つゞく)

(宮 城 正 夫)

再び甘蔗のテングス病について

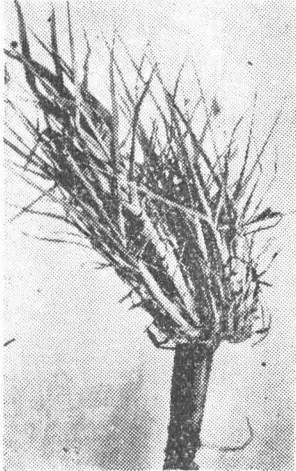
これまで交付がなかつた甘蔗の新しい病害が宮古で発見されたことは本誌第一号にのせた。これはその簡報である。

一、本病はこれまで夏植のみに発生すると思われていたが、春植にも発生することがわかつた。第一図のように株の頂端が穂状になり一枚の葉鞘に包まれている。この部分を解いて中を檢べると、梢頭部の芽子が十数本、多いの数十本、異状群生している。この病状がすゝむと第二図の様に薺状となる筈である

第一図 梢頭部が葉せうに包まれて穂ばらみ状になつている(春植)



第二図 梢頭部がほうき状となつたもの。所謂てんぐすく病の極端な形をしている(夏植)



が、春植に於ては薺様に展開したものは殆んど見当らない。二、三月現在の調査によると、新植の夏植にすでに発生している。

其方は前者と異つて穂状のものではなく、匪徒の中途に節間短縮の病状を呈する。即ち地上四―五節目から短縮が起り四、五節で終り、あとは再び普通並の生長を取戻しているのが普通である。この短縮部にある芽が伸長するために、被病部がやゝ扁平になつて見える。(第三図)病株から出る葉は多く淡黄色と緑色のモザイク状をなしている。或いは多斑をなすものもある。この病斑は、夏季の高温時に消失するのではなからうか。即ちマスキング(潜伏)するらしく思われる。

三、春植の被病茎についてアリックスを測つたところ、健全茎に比べて何れも一―二度低い結果を得た。即ち減収と品質低下が予想される。

四、上にのべた諸点から推察出来るように、昨年に比べて発生する時期が早目になつた。つまり、より稚い甘蔗に発生するようになつた。且つ宮古島における発生地域も広くなり、被害度もひどくなつていようである。

油漚本島にも第一図と同じ病状のものが南部方面に発生しているが極めて少い。

五、病因と病名について、病因は未だ断定するに至らないが、諸種の事柄から判断してバイラス(伝染病毒)のように思われる。そこで病状も勘案して本病を「さとうきびの天狗草病」と呼びたい。

六、防除についての注意事項は次の如くである。

一、無病畑から採苗すること。

二、バイラス病は兎角それを媒介する昆虫が居るから、その駆除を行わねばならぬ。

三、キビのワタムシ、コバネナガカメムシ、ウンカ類、ヨコバヒ